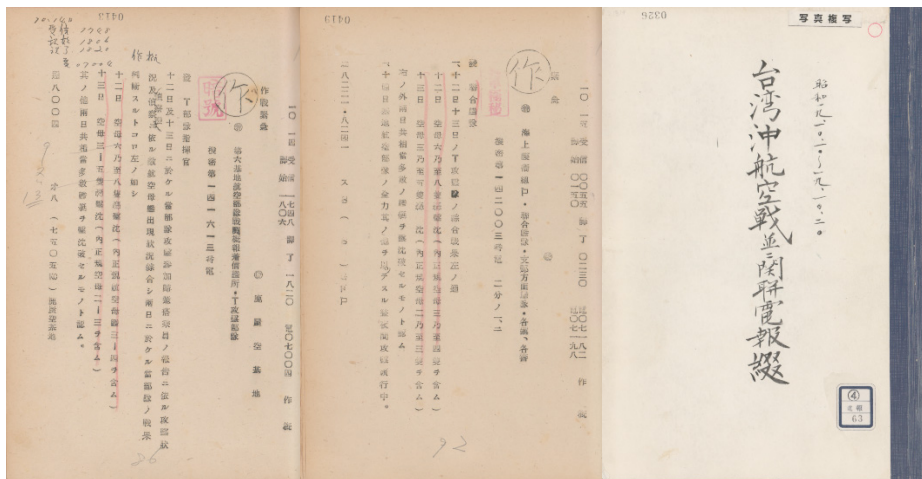




「台湾沖航空戦並ニ関連電報綴」

昭和 19 (1944) 年 10 月、比島進攻を前に、米軍は機動部隊により台湾を空襲し、これを迎撃する陸海軍航空部隊との激しい戦いが生じました。10 月 12 日から 16 日にわたって繰り広げられたこの「台湾沖航空戦」では、空母 11 隻撃沈・8 隻大破など、合計で 45 隻の敵艦船を撃沈・破壊したと大本営は大々的に総合戦果を報じましたが、実際には巡洋艦 2 隻を大破させたにすぎませんでした。また、この戦果を信じた大本営が、既定路線であったルソン島での決戦を急遽変更し、レイテ島で決戦を強行することにもつながりました。

上掲の写真は、米軍機動部隊を攻撃した「T 攻撃部隊」による 10 月 12 日及び 13 日の戦果を報告する電報（左）と、同内容を各方面に伝える連合艦隊の電報（中央）です（登録番号：④電報-63）。前者の電報で「十二日 空母六乃至八隻轟撃沈（内 正規航空母艦三及至四ヲ含ム）」「十三日 空母三一五隻轟撃沈（内 正規空母二及至三ヲ含ム）」という文面が確認できますが、後者の電報でもこれと全く同じ戦果を伝えていることが分かります。現地部隊の報告を客観的に検証する体制が整えられていなかったことが、上述の過大な戦果発表の主な原因でしたが、戦局の悪化による搭乗員の練度低下や悪天候などにより戦果の確認が妨げられたことに加え、陸海軍の対立や戦果に対する期待など、様々な要因が重なって過大な発表が行われました。